

## 特集：東洋英和の運動会

### 二つの最後の全学院運動会

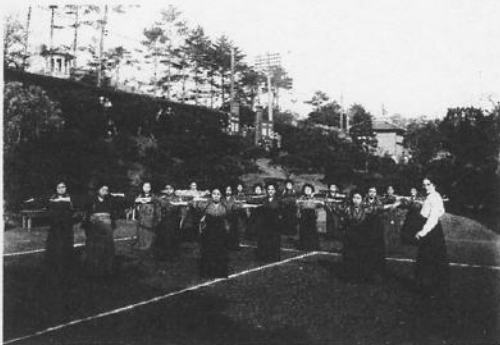
三 谷 操

東洋英和の年譜には1917（大正6）年11月23日に初めての運動会が開催されたと記されています。1912（明治45）年長野の県立高女を卒業し東洋英和女学校高等科邦語科に入学された臼田敏子さんは「振袖に近いような服装をされた皆様は動作は上品ですがまことに緩慢、体操の科目はあっても無きが如くわずかに軽い散歩をする程度」という状態を嘆き、校長のミス・クレイグに体操を奨励すべきと直接提案。その建議が採用され体操の授業を担当するよう依頼を受けたので、体操伝習所に聴講生として通い、速成ながら英和の初めての体操教師となられたと『東洋英和女学校五十年史』に書かれています。1916年には長野時代の経験から校庭運動会を開催し、これが翌年の「はじめての運動会」となる体操競技会につながったものと考えられます。

その後創立記念日の祝賀行事のプログラムの一つとして行われるようになった運動会は、1919年の創立35周年記念祝賀体操競技会を初めとして、40・45周年と5年毎に盛大に開催されています。幼稚園児、小学科・女学科生徒、師範科生だけでなく、観客の保護者や卒業生までもが一つの家族のようにお祝いムードに包まれ、

ともに競技や演技を心から楽しんでいる様子がいろいろな史料から伝わってきます。競技を楽しんで打ち解けた気分になったところで保護者会が開かれ、親・保護者と宣教師・教職員のより良い関係づくりに一役買ったことが宣教活動の報告にも記されています。また、臼田先生が動作緩慢と嘆かれた女学生たちが、数年間で「近頃の本校体操の規律整頓し来たりし事は誠に喜ばしき事なり」といわれるような進歩を遂げたのは体操主任井上あきえ先生のご指導によるものと同窓会会報に記されています。

昭和初期に学校の組織や教育内容をあらゆる面で近代化された校長ミス・ハミルトンのもとで、1933（昭和8）年に新校舎落成運動会、翌年には創立50周年祝賀運動会が行われています。制服とともに、衿とカフスに黄色が配色された白のブラウス、短めの紺のキュロットスカート、ガーネットの鉢巻というお洒落で機能的な体操服も定められました。晴雨にかかわらず運動のできる通称“雨天”と呼ばれる屋内体操場も完成。東京YMCA体育主事の柳田亨先生の週2回のバスケットボールのコーチを受けた生徒達が、休み時間や放課後も夢中になって練習する様子から運動会のプログラムにも取り入れられて、



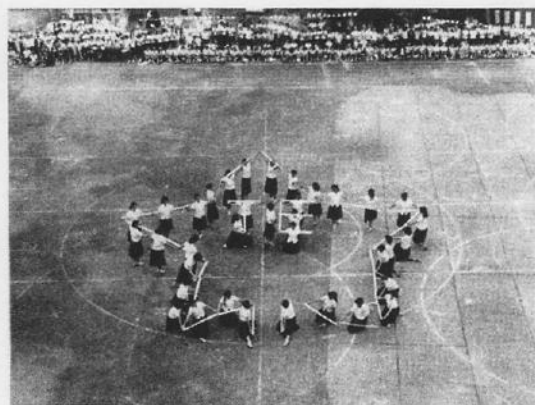
「はじめての運動会」（1917）



新校舎落成記念運動会（1933）

女学科1年から師範科2年までの全学年対抗のバスケットの試合は運動会の人気種目となり、憧れのお姉様方への応援も賑やかだったようです。

戦時色の濃くなる中でも1939年に創立55周年記念祝賀小運動会が行われ、1942年には隣接の熊本邸跡地が購入されて、“お山”と麻布教会の谷間にあった小さなコンクリートの運動場から一挙に広がった大運動場で、運動場落成記念運動会が開催されています。1943年には体錬大会という名のもとで大日本国民体操、興亜体操、女子青年体操や、防空競争・救護競争・突撃競争・銃後の女性など戦時下でなければ考えられない名の競技が行われ、授業に導入された雑刀が女学科1年生によって演じられています。1944年の創立60周年記念式典は警戒警報のため中止され、生徒たちは勤労動員や疎開で運動会どころか授業もできない状況が続きました。校舎は空襲による消失を免れたため終戦半月後には授業が再開されていますが、戦争のため3年間のブランクのあった運動会は、新学制が実施された1947年に再開されています。食料も衣服も住居も不足し栄養状態も心の潤いも乏しかった生徒達のために、矢川律子先生が考案されたのが幾何学リズム体操「線の造形」。ワイマンの“銀波”の旋律に乗って運動場にガーネットの波が美しく輝いた日は忘れられないと卒業生が『東光』に書かれています。その後高校3年生の有志による演技種目として受け継がれ、生徒達の憧れの演目となりました。英和の運動会を語る時に「線の造形」とともに必ず出てくる「行進」は、歴史が古く創立35周年に既に行われています。行進曲にのって隊列を増減・交差



線の造形 (1947)

など様々に変化させ、最高学年の生徒達が胸を張って堂々と歩く様子は、いつの時代の写真をみてもその貫禄に圧倒させられ、最後に描く人文字の“E I W A”が決った時の拍手喝采が聞こえてくるようです。

世の中が落ち着くにつれて、運動会にも楽しそうな種目名や横文字のダンス名が並ぶようになり、創立68周年の運動会からは新しい試みとして仮装行列が登場、満場の爆笑と拍手を浴びる運動会の呼び物の種目となっています。この年からお目見えした優勝旗をめぐる紅白対抗はますます熱をおび、応援合戦にも気合が入ったという記事が東洋英和新聞に掲載されています。

毎年幼稚園児から短大生まで全員で観客とともに競技や演技を楽しんできた運動会も、小学部の新校舎・運動場の完成とともに幼稚園と小学部の参加がなくなり、短大校舎が完成した後は中高のみとなってしまいました。そのため、1954(昭和29)年に行われた創立70周年記念運動会が「英和の運動場で行われた最後の全学院運動会」ということになります。東洋英和の成長過程での発展的解消ということになるのですが、一つの家族のように皆で楽しんで来た運動会がなくなってしまった寂しさを多くの人が感じたことと思います。

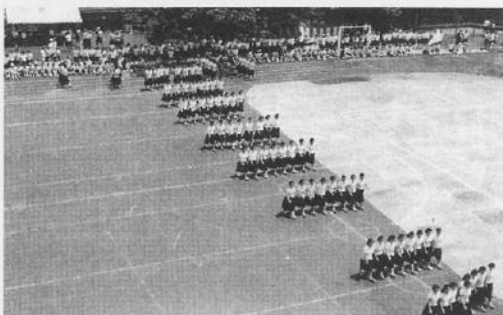
白田敏子先生をはじめこれまでの体育の先生方は女性ばかり。体育の教師は生徒達の体にさわって指導するから男性ではだめというのがその理由だったようで、創立70周年の年に初めて男性体育教師として佐々木孝男先生が登場されたのは画期的な出来事だったと思います。

その佐々木先生が中心となって各部代表の委員により、1969年に15年振りの全学院運動会となる創立85周年記念運動会の準備が始まりました。幼稚園児から短大生まで2000名を越す人数に加えて教職員、保護者を収容できる会場として駒沢オリンピック公園総合運動場第2球技場が選ばれました。交通機関はバスのみ、当日の朝からしか準備に取り掛かれないなどの問題を抱えながら、プログラムの決定、役割分担、生徒達の練習予定など5月頃から準備が進められました。日頃あまり交流のない他の部の人達と一体感が持てるようにと、それぞれの部で4色の縦割りの組を作り小学部から短大まで、赤・黄・緑・青に分かれて自分の組を応援する方式がとられました。星野ミサヲ先生によって高2

全員で踊れるようにアレンジされた「線の造形」、中3と高1で同時に両側の観客に見てもらえるように考えられた「行進」、中1中2による東洋英和の歌に振付けしたダンス「希望」などを先生のもとで必死になって取り組んだ日々が思い出されます。

本番まであと1ヶ月足らずになった9月、「運動会をボイコットしよう」というピラが全校生徒の机の中に入れられ、院長先生や部長先生の説明にも納得せず、校門の植え込みに立て看板が出されたり、ピラが配られたりしてその対応に追われました。昼休みに大講堂に呼び出され、同じ質疑のやりとりが何度も繰り返される団交もどきも経験させられました。今回この原稿を書くために運動会の歴史をたどって見ましたが、当時これだけの知識で理論武装していたら、もっと堂々と彼女たちとわたりあえ、卒業生の運動会への思いなど披露して煙にまくこともできたのにと、今更ですが残念な思いがします。

当日は晴天に恵まれ、準備も何とか間に合い、小学生は学校からバスに乗り、幼稚園児は親に連れられ、中高短大生も時差をつけて集合し無事開会式が始まった時はほっとしました。直線100メートルを全速力で走る経験をさせたいと思った中学生の徒競走では、手をつないだりスキップしながらゴールする生徒がいてはらはらし、あんなに練習したはずの行進で人文字の“85”の片方が行方不明になったりで、ぶっつけ本番のこわさを味わいました。運動会をボイコットした生徒の多かった高3のクラスでは、



行進 (1954)



創立70周年記念運動会 (1954)

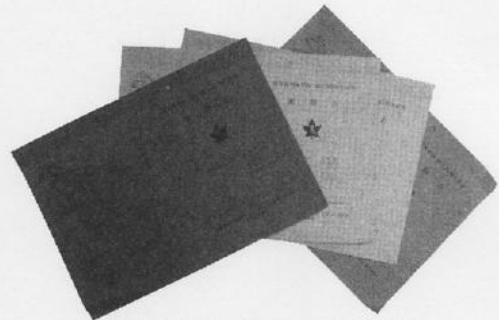
綱引きをする前から勝負がわかってしまうのでかえって観客から大声援を受けたり、中1の「追いかけたまいれ」では、籠を背負って逃げる男の先生方の身長が違い過ぎて不公平だと文句がでたりといろいろありました。幼稚園児と小1のダンスには“かわいい”の声と盛大な拍手、小4、5、6の鼓笛行進に大歓声があがり、短大生の優雅なフォークダンスを楽しみ、4色対抗リレーに力の限りの応援を送った一日となりました。参加者の多くが初めて経験した全学院運動会、初めて学外で行われた運動会、そして学園紛争の影響を受けた運動会として記憶に残る創立85周年記念運動会は、おそらく今後も「東洋英和の二度目の最後の全学院運動会」であり続けると思います。現在の規模で全学院運動会を開催する勇気をお持ちの方が現れるまでは…。

運動会の歴史をたどることは同時に体育のあり方をたどることになりました。ミス・ハミルトン校長は、清らかで堅固な信仰心の器となる健全な身体を造ることも教育の重要な一環であるとして、運動施設の充実を計られました。これを受けて体育部長の水木百代先生は、ややもすれば静的方面のみに力を注がれて来たキリスト教学校の子供達が若くして病に倒れ命を落とすのを悲しみ、動静の渾一された下に教育されてこそ、意志のがっちりした人間が出来上がる。これこそ宗教教育の真の目的を達し得ると考えられて運動会、遠足、放課後の運動のほか水泳、キャンプ、スキーにも力を注いだと述べられています。このような先輩の先生方の思いが積み

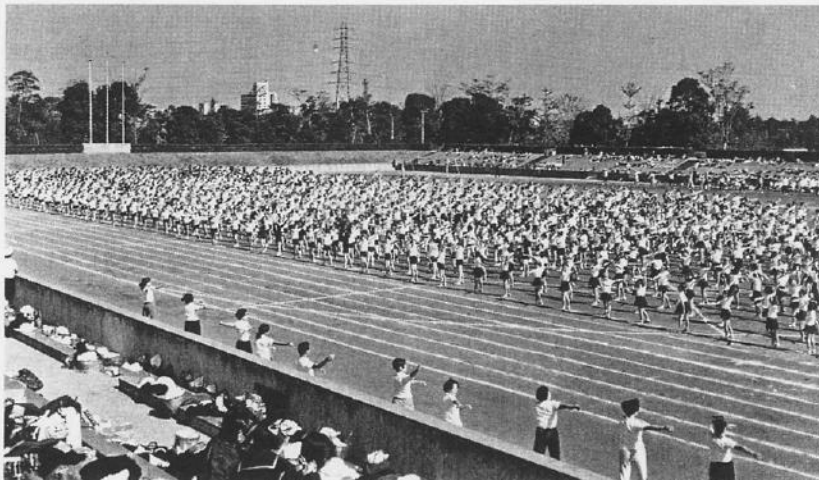
重なって今があると改めて強く感じました。

中高部の専任として10年、非常勤講師として26年の勤務を終えて2年前退職した折に、たくさんの方々から「英和御卒業おめでとうございます」とお声をかけて頂きました。卒業生の一員に加えていただいたつもりでおりましたが、昨年12月に完成させた『東洋英和バスケットボール部70年史』の史料集めに続き、今回の運動会の原稿依頼で史料室に何回か足を運ぶうちに、まだまだ勉強不足で卒業は認められないといわれているように感じました。85周年の運動会だけしか経験していない身でこのような原稿依頼をお引き受けしたことは、かなり無謀でしたが、英和の運動会にはこんな歴史もあったということだけでもお伝えできたら、お役目が果たせたのではと思っています。ガーネット色の書物に埋もれて過ごした3ヶ月間の働きが、卒業証書をいただく資格となったかはまだ不明です。

(元中高部教諭)



赤・黄・緑・青の4色でつくられた創立85周年記念運動会のプログラム



創立85周年記念運動会。オリンピック公園にて(1969)

## 秀村欣二先生の思い出

島 創平

筆者と秀村先生との関わりは、①古代ローマ史研究者として、②無教会キリスト者として、そして③東洋英和の教員として、この三つの接点を持つ。①については言うまでもなく、先生は古代ローマ史研究の大家として、幅広い学識に裏打ちされた数々の業績を残された。②については、先生は若くして塚本虎二先生の集會に属され、以後一貫して無教会キリスト教者として信仰を貫かれた。そして③について、先生は1987年7月、東洋英和女学院短期大学学長に就任され、1992年3月まで務められた。筆者が英和に勤務するようになったのは1989年からである。それまでは西洋史関係の学会や研究会、あるいは無教会キリスト教の講演会などで、時々お顔を拝見し、ご挨拶する程度であったが、先生とより親しい交わりを持つようになったのは、やはり英和においてである。

英和に来られた先生が志されたことは、まず学生との直接の交わりを持つことであり、そのため、学長として多忙であったにもかかわらず、キリスト教史の講義や、ヨーロッパ文明論の英書講読といった授業を担当された。またプレイデーやかえで祭などの学校行事にも、(時には奥様ご同伴で)積極的に参加され、学生との交流を楽しまれた。一方先生は、短大学長と共に、短大付属のかえで幼稚園の園長も兼任された。土橋克子先生の思い出によると、秀村先生は園児から「おじいちゃん」と呼ばれ、時には一緒にままごと遊びをしたり、クリスマスには先生自作の紙芝居を読みきかせられるなど、園児からも慕われていたという。

しかし短大学長在任中、先生が最もご苦勞されたのは、四大との関係であった。四大は1989年に開学したが、短大から四大への移行期にあって、先生はあくまで短大の主体性を尊重し、特に「横浜の短大としてのレゾン・デートル(存在理由)」について、目先の短絡的な観点からではなく、中・長期的な視点に立って、その将来的展望を検討していくという姿勢を取られた。何よりも先生が重視されたのは、保育科の設立以来短大の伝統である、キリスト教教育に基づく建学の精神を維持・継承していくことであったと思う。

しかし先生のこうした姿勢は必ずしも十分に

理解されたとは言えず、四大との関係においても、先生御自身は相互理解と互譲の精神によって、四大と短大との共存・共栄を図られたが、現実には様々な問題があり、また教職員の一部には、先生の慎重な姿勢や、いわゆる「学長らしくない」謙虚なお人柄に、物足りなさや不信感を感じる向きもあったようである。しかし先生は一言も言い訳や抗弁もせず、この困難な役割を引き受けてくださり、その任期の最後まで、短大の教職員のために尽力された。

最後に一つ、エピソードを紹介したい。1990年4月、大嘗祭に関する声明を出した弓削達フェリス女学院大学学長宅の銃撃事件が起きた。当時我々は、新生のオリエンテーションのため、御殿場の東山荘に滞在していたが、秀村先生は早速臨時の教授会を現地で開催され、我々はこの事件に関する弓削先生への全面的支持を表明した。この出来事は、社会的不正や暴力に対する秀村先生の断固たる姿勢を、具体的に示しているように思う。(大学教授、史料室委員)



### 秀村欣二先生略歴

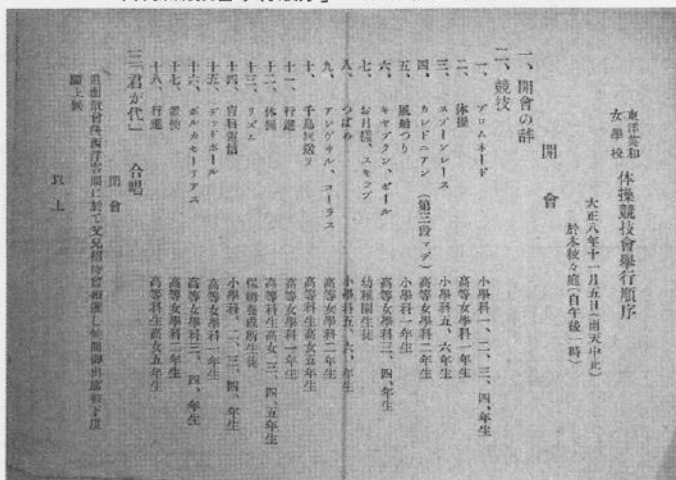
1912年 6月19日福岡市に生まれる  
1935年 東京帝国大学文学部西洋史学科卒業  
1937年 東大大学院在学中に応召。3年間中国の野戦病院部隊へ  
1943年 東京高等学校教授就任  
1950年 東京高等学校の廃校により東大教養学部に移籍  
1973年 東大名誉教授。青山学院大学文学部史学科教授就任  
1982年 東海大学文学部史学科特任教授  
1987年 東洋英和女学院短期大学学長に就任(～1992)  
1997年 4月8日逝去(享年84歳)  
〈著書〉『ネロー・暴君誕生の条件』、『人間と文明のゆくえートインビー生誕100年記念論集』(監修)ほか多数

## 〈資料紹介〉 13 運動会のプログラム

東洋英和の運動会の原点はどこにあるのか。この疑問を解くべく、今号で「二つの最後の全学院運動会」の特集記事をお書き下さった三谷操先生が史料室保管の運動会の記録類を調べ、お纏めくださいました。そのなかから、大正期、昭和初期、戦時中のプログラムを中心にご紹介いたします。 (史料室 田原)

[大正期]

「体操競技會舉行順序」 1919 (大正8) 年11月5日



史料室にある最も古い運動会プログラム。

【史料1】体操競技會は此の度を以て第三回となす。今年は特に本校創立三十五周年に相當せるため、その記念祝賀のプログラムの第一日に催さるゝ事となりたれば、従来に異なり、一層深き意味を持って舉行されぬ。…當日は早朝より空晴れ渡りて、袖吹く秋風もさはやかに、申分なき運動會日和なりき。…午後一時開會、囂々たる行進曲に導かれて一同會場に整列。校長ミス・クレークの簡單なる開會の辞あり。それよりプログラムに従ひて体操遊戯競争と拍手に迎へられ喝采に送られて順次に演ぜられぬ。どの所に於てもまた如何なる時に見ても整然として氣持好きは体操なり…。幼稚園生徒の愛らしき歌に合せて演ぜられし「お月様」「スキップ」など見る者の心に美しき印象を残して面白きうちに何となく涙ぐまれぬ。本年より新たに加はられし保姆養成所の方々のリズムの遊戯も珍しく一層の興味をそへたり。小学科一年生の風船釣り皆勝たせ度き思せられて飲衆をはらはらせぬ。競争者の熱心に加へて應援の勵勝利の定まりし時の破るゝばかりの喝采笑聲浮世を忘れてこゝに樂土を見出しゝ如き有様なり。高等科生高等女学科五年生の行進を以て今日の豫定の競技も終わりを告げぬ。…父兄の方々ハ西洋客間に招かれ給ひて先生方を茶菓の中にしばらく短なき談話に時を過されたり。近頃の本校体操の規律整頓し来りし事ハ誠に喜ばしき事なり。現代女子の活躍の大いに期待さるゝこの時他日國家社會に出づべき準備なる学校教育中に於て体育の必要ハ述ぶる迄も無之今後とも一層の發展を心より望まれて來賓も家路につかれぬ。 —『東洋英和女学校創立三十五周年祝賀記念同窓會々報』(1919年)より—

【史料2】…私たちはこの三五周年を両親たちと真から「氷を割る」年にしようとして決心しました。そこで、「創立記念日」の午後を、「両親の日」とし、「体操競技會」の後、教職員全員が—日本人も外国人も—客間で歓迎會を催しました。これは非常に満足できるものでした。いつもより多くの人々が来たばかりでなく、お茶とお菓子の効果で氷が割れただけでなく完全にとけたのです。… —『敬和會』第53号(1990年)より—

【史料1】は卒業生の澤田貞子さんが書かれた体操競技會の様子です。あまりの名調子に引用が長くなってしまいましたが、幼稚園、小学

科、高等女学科、保姆養成所の全校の生徒学生が参加し観衆とともに心から楽しんでいる様子が伝わってきます。またこの運動会のことを宣



### 【史料3】新築校舎落成祝賀運動會

…この日は気持ちよく晴れ渡つて、運動會には上乘の秋日和、運動場には白線が引かれ、周囲には天幕を張り、紅白の幕をめぐらし、運動會らしい気分が漲て居た。北側の道路の塀ぎわに神宮競技場張りに三段の階段が造つてあるのが今日の絶好の見物席。木の茂つた高いほうの庭も、これまたよい席で澤山のお客様の椅子が用意され、其處に黄とガーネットで飾られた大きなプログラムが押立てられた。…全體の體操の時、如何にも運動場が狭くて少しの餘裕もなく、お客様の前まで生徒が居並ぶのが氣に懸つたし、徒競走も距離が短いやうに思つた。然し生徒は一生懸命。三人二脚もすれば、障礙物も何のその、潜り抜け跳ね越え物干競争と順次に進んで、第九の幼稚園々児の玉拾ひの終りに、無数の青と赤の風船が、園児の校章の楓のような手から澄み渡つた大空にはなされた。清々しい秋風に乘つて高く舞ひ上るのを見上げて、お客様も生徒も拍手喝采した。朗らかな運動會気分であつたが、誰も誰も一家族のように心を同じくして楽しむことの出来るのは、これは又運動場の狭い故であろう。…

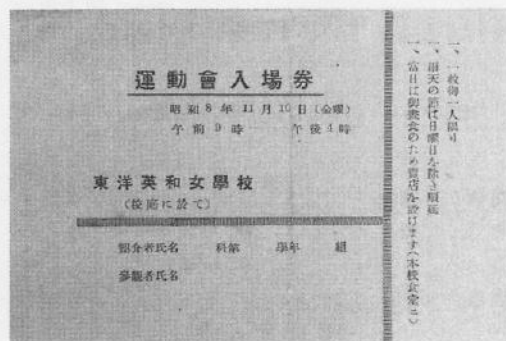
—「母校近況」(「昭和八年度 同窓会会報」)より—

【史料4】御客様もボツボツ御見えになり、私たちは列を作つて喜びに高鳴る胸をおさへながらマーチに合はせて運動場の白線をふんで整列した。…私は役員だつたので器具置場の前にいすを持つてきて陣どつた。…旗をたてたり、球をひろつたり、平均壺をもつていつたり、器具係の役は先生が仰言しやつた様にとてもいそがしい。用をすましてかへると丁度幼稚園の生徒の「球拾ひ」だつた。とても可愛らしくて食べたいほどだつた。…御教室にかへつて、皆物も云はずに御辨當にがつく。午前中のプログラムの内の批評を口にほぼぼりながら云ひあつたりしてすませたのは十二時二十分。午後のプログラムは一時三十分からだ。……「バスケットボール」私達の級はまけたけれどB組を應援して向こうの運動場に行つた。…もう今は準決勝で三年と四年の対戦。大接戦の後ต่อ々四年生の勝となつた。四年生と師範科生、とても大変な試合だつた。師範科の方は血まで出しておしまいになる程の大接戦。見ている方も手に汗をにきつて、悲鳴をあげたり喜んだり。選手の方はさぞ大変だろう。遂に大接戦の後、四年生は師範科におしくも負けてしまつた。皆様泣いていらつしやる。

「皆さん、すぐに向うにお集まりください」の先生のお聲に皆ハツと我に返りすぐ整列した。…櫛引先生の閉会の辞があつてみなそれぞれ云いつけられた場所をちやんと片づけて「ホツ」としたのは四時だつた。…

—高女科2年A組中林藤枝「運動會を見て」(「昭和八年度 同窓会会報」)より—

【史料3】で引用した文章のあとには、「金魚の望：よく行われる競争である。麩を脚へて走るのを見て、あれがお菓子ならいいわねとは、誰も心の表した幼い人の評」、「提燈競争：卒業生の競走、軽げな洋装で、美しい袖をひるがへして、羽織の脇へ袖ををし込んで早速の襷代わりとした甲斐甲斐しい姿で、提燈の火を消さじと大事そうに抱へて、及び腰に走る」、「職員紅白玉拾ひ：西洋の先生は帽子へ鉢巻、日本の女子先生は生徒並の鉢巻、男子先生は頭痛鉢巻の態よろしく、勇ましく運動場狭しと駆けめぐるので、物珍しそうに生徒が應援する」などとプログラムの種目ごとに一言が載っており競技の様子が伝わってきます。生徒・教師だけでなく卒業生の種目がプログラムに入っているのが興味深いです。また、同じ同窓会会報の誌面に実際に参加した生徒の感想が掲載されていたので、少し長くなりますが【史料4】に紹介します。



新校舎落成祝賀運動會の入場券 (1933)

